

## 学生たちの観た日本

大学名： 北京大学

氏 名： 謝霄鶴

テーマ： 3.マナーのよさと思いやり

5.アニメなどのソフトパワー

6.今後ますます中国でニーズが高まる技術

① 日中両国は古くから礼儀の国であるが、日本文化における細やかなマナーや礼儀そして他人に迷惑をかけないという相手の立場に立った考え方は、より際立ったものである。こうした考え方はすでに社会に浸透しており、日本人の生活のあらゆる部分で感じることができる。或いはこれもまた中国人が常々称賛する、エスカレーターで片側に立つ、公共の場所で大声を出さない、出会った際には挨拶をする、「よろしくお願いします」と言うなどの日本人の素養の高さなのかもしれない。

こうしたマナーは形式化しすぎで、すでに人々が遵守すべき「しきたり」になっているという人もいるかもしれないが、私が思うにこうした社会規範は規定でも「形式化しすぎ」でもなく、異なる個人間の摩擦を減らす社会における潤滑剤のような存在である。まさにルソーが言う通り自然状態の人間は敵対関係にあるが、文明の発展と礼、徳、義が人と人の関係を発展させ、「社会」の二文字を物語っているのである。

② アジアをリードする日本のアニメ、映画、音楽等のソフトパワーの発信度合には感嘆せざるを得なかった。秋葉原では自らの好きなものを探す様々な国の人々の姿を見かけた。私たちの世代において幼いころに「ドラえもん」、「ポケットモンスター」、「コナン」を見たことがない人はほとんどいない。また日本はさらに世界最大のシングル盤市場であると同時に世界で二番目に大きなアルバム市場である。これは日本人の高い著作権意識に関連している以外にも、日本の音楽業界の成熟度合を示すもので、タワーレコードやHMV等の大型CDショップは中国国内ではほぼ見かけない。

③ 日本の生活における利便性の高さもまた大きな特色である。セブンイレブン、ファミリーマートといったコンビニエンスストア、自動販売機等はすでに広く普及しており、ホストファミリー宅での宿泊体験から言えば、「スマート住宅」は将来的に中国市場でのニーズが高まる技術で、ホストファミリー宅の照明システムや浴室システム及び家屋全体の換気システムには大きな利便性を感じた。よってこうしたものもいずれ中国の一般家庭に普及していくと信じている。

大学名： 北京大学

氏 名： 陳燕瓊

テーマ： 3.マナーのよさと思いやり

日本に来てからはどこに行っても至る所で「すみません」というお詫びの言葉を耳にした。私たちの接待を行うスタッフはいつも私たち一人ひとりに「いらっしゃいませ」と声をかけてお辞儀をしていた。そのため私は日本に来てから「すみません」、「有難うございます」の言葉を真っ先に覚え、またお辞儀をするようになった。こうした日常的な礼儀は日本文化に深く浸透している。

これと相通じるものとしては「他人に配慮する」という考え方がある。三菱UFJ銀行の王女史の話にあったように、プ

リントーが壊れたという出来事への対処として、他者の利便性を最大限高めるため、彼らが同僚にそれを伝えると同時に最寄りのプリンターの場所も併せて伝えるということは一見煩雑だが、必要なことであり、多くの人の作業効率を高めることができる。この他公共の車両において人々が食べ物のおいを車内に充満させないために食べ物を包んだり、他の乗客の迷惑にならないために小声で話をしたりしている。また優先席は常に空いており、どんなに車内が混んでいても人々は立ったままで優先席に座ることはない。これは中国では見かけない光景である。

時々こうした高い自覚と礼節は人と人の距離を遠ざけると感じるがあったが、ある時ホテルに戻る際に道に迷った私はとあるガソリンスタンドに行き道を尋ねたところ、そのスタッフがとても親切にホテルまでの道を教えてくれた。これには心が温かくなる思いがしたのと共に、彼の礼儀正しさからは何の距離感も感じられなかった。よって人と人は目に見えない線につながっているのだと思った。ほとんどの場合、私たちは会釈をするだけの付き合いでも、いざという場合はその線が自然と伸び、交流をすることができるのである。

日本文化における社会的責任感、集団帰属意識そしてマナーや自覚といったものはいずれも重要であり、私たちが学ぶべきものである。

大学名： 北京大学

氏名： 高乾

テーマ： 4.日中間の交流

#### 6.今後ますます中国でニーズが高まる技術

一個人としての私の今回の訪日に対する感想は必ず自身のこれまでの経験の影響を受ける。これは全面的なものではなく、ひいては正しくはない可能性もある。

ここでは日中間の交流について述べたい。これはこれまでの考えや、参事官のスピーチその他様々なものをベースとしている。キーワードはグローバル化である。

日本を訪れる前、私は常に中国と日本はその国民性や文化において最も似通っていると思っていた。地縁的には私たちは近く、歴史的には私たちは密接な付き合いがあり、人種や文化的には私たちはほぼ同じである。私はかつて、日中両国はEUのような連合を構築すべきだと考えていた。しかし20世紀の日本は「沈没」し、歴史的交わりであるEUも「沈没」し、私たちの世界第二位の経済も期待はされていない。いかにしてアメリカ強の地位を崩すのか？短期的に何か方法はあるのか？国内の消費を発展させ内需を拡大するのか？一帯一路により海外市場を開拓するのか？それとも同盟国を味方につけ新たな冷戦を始めるのか？いずれも先が見えない状況である。アメリカ・カナダ・メキシコが貿易協定を締結し、日本・中国・韓国が提携を模索するという特殊な時期において、中国とアメリカの覇権争いという言葉は相応しくはない。この戦争に関して私は、中国が失敗そして零落し、一つの経済となるが先進的とは無縁になる、もしくは中国が成功し、一定の影響を持つようになる、の二択しかあり得ないと思っている。この期間そして今後においては、私たちは歴史を忘れ、誠心誠意日本と提携を結ぶ必要があると思う。日本の最も優れているのはそのモデルであり、日本の管理モデルは世界をリードしている。一方私たちの優位性は国土、人口、簡単な構造、優れた実行力にある。

私は数学を専攻しているため、「マルコフ連鎖」の概念を引用したいと思う。未来は現在とのみ関係があり、過去とは無関係である。私たちはなぜ現在を活かし未来を勝ち取らないのか？なぜ現実に頭を悩まし、歴史の影響を受けるのか？現在の世界は変化が早く、グローバル化の波が課題に直面し、多国間主義が崩壊している。私たちは日中関係を大きく進展させ、発展とイノベーションにより人類の発展に貢献する必要がある。

大学名： 北京大学

氏 名： 李南鶴

### テーマ： 3. マナーのよさと思いやり

「礼」は道徳レベルでは個人の内面からの自己抑制である。中国は「礼を以って国を治める」国であり、それぞれの国ごとの価値観の違いは「礼」という超我的な重点に違いをもたらしている。以下に日本のマナーについて述べてみたい。

私は、日本人の物事の処理における根本的原則は「他人に迷惑をかけない」ことだと思う。この考えから日本人の行為、即ち私たちがよく「素養」と位置付ける概念について説明することができる。なぜ日本人は常に「ありがとう」を口にするのか？他人の手助けを受けた時、「私」の心の中では他人に迷惑をかけたと思い、それにより一種の「借り」を感じる。そしてお礼の言葉はその「借り」を表現したものである。もちろんこうした感謝は各文化に共通したものであるが、日本特有の「借り」の考えには感謝よりも深い思いが含まれている。この他、使った後の箸を箸袋にしまうといった細やかな部分もまた日本人の心からの他人に迷惑をかけないという習慣である。こうした心の中に根付いた理念は外在的な規定や制約とは異なり外界の圧力を内在的な原動力とするため、私は「礼」と称するに足りると思う。

「迷惑をかけない」との基本理念を昇華させた場合、「他人を楽しませる」となる。ホームステイの際、私はホストファミリーへのプレゼント用にお菓子を準備していたが、彼らの口に合うかどうか気がかりだった。日本では一般的に贈り物を受け取った際は送り主の目の前で開封し、お礼を述べることで送り主を安心させる。同様にこうした観念は企業にも浸透しており、サービス業では「客が我が家に戻ったように感じる」ことを追求し、心温まるサービスの提供に尽力している。私の考えが浅いのかも知れないが、ここで気になることがある。もし一方がもう一方に対しておもてなしをし、それを「受けた側」の心に多くの「借り」が生まれた場合、サービス業の立場から彼らは受けた側の借りに対してさらに借りを感じるのではないだろうか？だが双方が互いに互いのギブアンドテイクにおける最良のバランスをとるのかについては、恐らく日本人が最も精通した対処の方法があるのだろう。私は将来の生活や様々な体験においてこうした「複雑だが誠実」な感情についてより深く理解することで、日本人の論理上の「礼」とそれらの具体的な表現について読み解きたいと思う。

大学名： 北京大学

氏 名： 史喬心

### テーマ： 1. 国民性についての理解

今回の日本訪問では真実の、生き生きとした、そして他とは違う「日本国」を目の当たりにしたが、感想については日記ですでに記しているの、ここでは日本の国民性について自身の見解を述べたい。偏向的な部分については大目に見てほしいと思う。ここでは日本における自己抑制と感覚的な享楽とのバランスの分析を重点とする。

地下鉄や街中であれ、また日本の会社であれ、いずれも常に重苦しい雰囲気を感じられる。こうした高度な自己抑制の環境において、日本人の欲望とのバランスがどのように取られているのかは検討すべき問題である。実際に日本では義務と楽しみははっきりと区分され、心の中の欲望と抑制のバランスがとられている。

彼らは厳しい道徳規範を有しているが、感覚的な享楽に寛容である。なぜなら道徳は義務と良識にのみ関わり、享楽はこれら二つに影響しない限り、認められるべき一種の良い事柄だからである。例えば日本人は愛情を享楽とし、家庭と婚姻を義務としている。そのため男性が妻に対する義務を終えた後に、公明正大に愛人を囲ったり、芸者と遊んだりすることは、一部の伝統的観念を持つ妻としては許されるものである。これはまたセブンイレブンのコンビニで成人向け漫画を見かける原因ともなっている。他の地区の観念において倫理に反するこうした手法は正に日本人の家庭への責

任感と感覚的な享樂に対する区分を表している。こうした点はまた、社会が高度に秩序化、規則化し、物事を緻密に注意深くそして適切に行う日本において風俗産業が非常に発達している理由を示すものである。例えば私たちが宿泊したホテルニューオータニの向かい側には多くのホストクラブやゲイバーが立ち並び、直接路上で客引きをしていた。こうした矛盾については日本人が君子面をしているわけではなく、観念の違いによるものである。もしこの良識と享樂が対立する場合、日本人は享樂を捨て品格を重んじるのである。

日本人は肉体と精神は互いに消長する関係だとは考えておらず、反対に肉欲と精神にはそれぞれ善と悪があるため、彼らはどれか一方を追求するのではなく、精神と肉欲のそれぞれ良い部分を求めることで心の中の欲望のバランスをとっている。もちろん、人々のなすべきは義務の履行であり、生活に苦しむことではないため、彼らは困難な人生に対して早くから準備をし、すべての代償を払う決心をしている。

よってこうした理解の下、日本における様々な矛盾の状態への説明がつく。バランスは常に両極端におけるトレードオフである。

各階級の人々は現状から安心感を得、ルールを守ることを尊厳とし、それぞれ義務を担い保障を獲得している。生涯恩恵を受ける日本人は一生をかけて義務を履行し、たとえ苦しい思いをしたり犠牲を払ったりしても感謝の心で恩に報いる。服従と復讐は榮譽という共同の目標により共存し、榮譽を守ることを気高いこととしている。感覚的な享樂と自己抑制の義務は人体的にそれぞれの役割を発揮し、両極端さが天秤のバランスをとっている。

様々な両極化の状況は互いに抑制した状態で日本人の身体に共存しており、私たちはそれを矛盾と見るが、彼らは自身の内在的なバランスと自身への妥協を実現しているのである。

全体的に見て、日本民族の性格は依然として抑制の傾向にある。正に彼らの名誉や外在的な印象への強い重視により、彼らの優劣が共存した恥の文化を形成している。他人の見方を気にすることで進歩への原動力を獲得し、またそれらを過度に気にするあまり苦しみや不安を抱える、こうした態度はどこから来るのか、これは依然として検討の余地がある。しかしながら分かることは、日本民族の性格は正に彼らの愛する桜のようであり、美しい期間は短く壮烈に散るが、ひとたび花開けば非常に盛大なものを見せ、亡くなる時にも春の土に返る義務を果たす。生と死の過程において不滅の個としての尊厳を守る、これこそ日本民族の最も主だった性格である。

今回の日本訪問において、私はまたこうしたバランスはちょうど変化の真っただ中にあることに気が付いた。「花開けば蝶は自ずとやって来る」、現在の日本がこれほど多くの観光客や交流そして提携をする人々を引き付けているのは、正にその文化の香りや性格における魅力によるものではないだろうか？

大学名： 北京師範大学

氏名： 陳心如

テーマ： 1.国民性についての理解

3.マナーのよさと思いやり

中国でこれまで幾度となく店員から冷たい対応を受けてきた私は、日本のサービス業の素晴らしさに感服させられた。日本人の細やかで敏感な神経と血液にまで浸透した「他人に迷惑をかけない」という遺伝子により、日本人は物事への対応の際に相手に迷惑や気まずい思いをさせることを最大限避けるという点をベースにしていると常に感じるが、これはサービス業に限ったことではなく、初めて目にした場所のすべてで感じられた。もし観光をするのであれば日本は理想的なリゾート地であり、加えて外国人という身分から、きっと自国人よりも寛容で親切な待遇を受けると思う。

だが日本で長期に生活しこの人々に溶け込もうとした場合は、そうではないかもしれない。私は日本への留学予定があるため、今回様々な観察の際に幅広い視点で色々な情景を想像した。ホテルや日本企業の満面の笑顔のスタッフについては信頼性を感じたが、自分ひとりでホストファミリー宅のリビングで天井を仰いだ時に感じた距離感とはまた、部屋

の中の一頭の象のように私の神経を圧迫していた。

日本人はマナーの基準をとっても高く設定していることから、彼らは礼儀正しいと同時に冷淡で、心を開くと同時に壁を作り、互いに距離を縮めると同時に一定の距離を保つ。こうした矛盾と関係は理解するのが難しいが、また惹きつけられるものがある。真実は幾層もの婉曲の中で解読を待っており、やり取りの中に隠されている。そして日本人はそれを「触れ合い」と呼ぶ。

大学名：北京師範大学

氏名：陳怡帆

テーマ：4.日中間の交流

#### ① 日中間の政治的駆け引きにおける宣伝

日中間のメディアの使用における習慣の違いは比較的大きい。中国国内では新聞やテレビから情報を得る若者は非常に少ないことから、個人メディアの時代において政府は完全な言論の独占権を有することがなくなった。情報の獲得において多くの個人メディアは政治への配慮や現在の対日政策への順応の必要がなく、日本に関連する情報を転載もしくは独自に発表しているため、民衆の日本の情報を知る手段が増え、見方も多角的になったことが、近年の中国人の日本に対する好感度を高めている要因の一つだと思う（調査データ有）。

#### ② 日常生活における政治の氷解

民衆の生活が高度に政治化した国は正常ではない。日本では街中において右翼勢力によるスピーチなどがあつたりするが、足を止めてそれを聞く人はほとんどいない。日本ではまた中国に関するマイナスな報道がとても多いが、個人レベルではそうした政治的内容は生活において氷解される。直接触れ合うことを通じて相手を知る時、それは人と人が感情を育んでいるのである。今回の活動を通じて子どもらには国籍や肌の色などの違いにより人を判断するのではなく、自らの思いや触れ合いにより判断してほしいとのホストファザーの言葉がそれを示している。

最後に、コミュニケーション学の多くの実験において、対人コミュニケーションの影響はマスコミュニケーションよりも大きいことが証明されているため、こうした活動が今後も続いていくことを願っている。

大学名：北京師範大学

氏名：金欣

テーマ：3.マナーのよさと思いやり

4.日中間の交流

日本に行く前の日本に対する印象は、清潔でマナーが良く、何をするにも手を抜かないといったものであった。

そして実際に日本を訪れ私のこうした印象は正しかったことが証明された。私たちの隣国である日本には私たちが学ぶべきものが沢山あることは間違いない。

「マナー」はすでに日本人一人ひとりに浸透しており、彼らの性格の一部となっている。こうした「程良い」マナーは他者に温かみをもたらし、人と人の関係をより友好的にまた調和のとれたものにしていく。

日本人の思いやりの度合である「他人に迷惑をかけない」という考え方は私たちが学ぶべきものである。もし一人ひとりが他者のために思うことができれば、社会においてどれだけの衝突を減らすことができるだろうか？日本国民がどのようにしてこうした性格を形成したのかは分からないため、帰国の後にこの点についてさらに理解を深めたいと思う。いずれ

にしても、今回の日本訪問では日本という国についてこれまで以上の興味を持つことができた。

今回の活動で私たちは日本の有名な企業や大学と交流を図った。そのプロセスでは本当に多くの収穫が得られ、中国人と異なる日本人の仕事や学習の雰囲気を経験することができた。日本には独特の国民性があり、そうしたのも彼らの仕事や学習への姿勢に反映されていた。その中でも最も印象的だったのは彼らの責任感で、彼らは自分の持ち場ですべきことをしっかり行い、いかなることにもとても真剣に向き合い、個人的なことでグループに影響を及ぼすことはない。これもまた相手の立場に立って考えることに長けていることの表れである。

私にとっての日本は秩序やマナーがある国だが、まだ把握しきれていない部分も多いため、今後新たな発見ができることを願っている。

**大学名：北京師範大学**

**氏名：陳卓**

**テーマ：3.マナーのよさと思いやり**

#### **4.日中間の交流**

日本に来る以前から「他人に迷惑をかけない」という考え方が日本人に浸透していることを耳にしていた。これまではこの点について狭義の「他人の邪魔をしない」、「他人を困らせない」という理解に限られていたが、今回私はこうした点は他人に充分配慮した上でのものであることを知った。私のホストファミリーを例にすると、私の到着前から様々な中国の調味料を準備し、私の好みに配慮した食事を提供してくれた。日本人のおもてなしの一つである「ゲストが最初にお風呂に入る」という点も「他者を優先する」との考え方をしっかりと表していた。

日本企業の従業員やホストファミリーとの交流では、たとえ中国に行ったことのある人でも現在の中国についての理解が乏しくまた偏っていることに気が付いた。これはまた多くの中国人についても同じことが言える。これは正に、日本を訪れると、真実の日本はメディアや書籍上のそれとは多くの違いがあることに気が付くとの横山さんの歓送会でのお話の通りであった。そのため私たちにとっては、こうした異なる部分について理解を深めていくことこそが重要になる。

**大学名：北京師範大学**

**氏名：龍炫彤**

**テーマ：3.マナーのよさと思いやり**

#### **4.日中間の交流**

日本に来たことがなくても、日本のドラマを見たことがある人なら、日本はとてもマナーを重視する国だという印象を持っているはずである。そして日本語を学ぶ私は言葉の面からもそうした点を感じることができる。日本語における敬語はとても扱いが難しく、言葉を学ぶ者にとっては永遠の難題だと言える。敬語はその対象の違いにより、尊敬の度合いも異なり使用する場面も異なるが、「です」、「ます」といった一般的なものは日頃から幅広く使われている。日本では、他者の手助けを受けた場合、時に「すみません」という言葉で感謝を表し、同時に迷惑をかけた相手側への謝罪の気持ちも表す。これは日本の礼節における他人に迷惑をかけないという最も重要な考えを体現している。この他、日本人との対話において、彼らは頻繁に相槌を入れることで相手の話すことを真剣に聞いていることを示していることに気が付いたが、この点も私はマナーの一つだと思う。またもしゲストが自宅に泊まる場合、ホストはゲストを先にお風呂に入れるという点についてはかねてより耳にしていたが、実際にホームステイの際にそれを体験した時にはゲストである私は心理的に

重い負担を感じた。日本人は相手の気持ちを察することにとっても長けているが、これもまた他人への配慮の表れであろう。常に相手の気持ちに配慮した上で自分の行動を変える。ホームステイの際に最も多く耳にした言葉は「大丈夫ですか」で、彼らは何をするにも私の意見を求め、私の同意を確認してから行動していた。この他、言いにくい願いがある時は、彼らは往々にして私の表情からそれを読み取り、自発的に私の手助けをしてくれた。

それからもう一点述べたいのは日本人の時間に対する考え方である。何をするにも彼らは前もって計画や時刻を定め、それに基づいて行動する。ホストファミリーのお兄さんやお姉さんとの外出の際にも各ポイントの時間などを整理して私と共有し、外出後は頻繁に時計に目をやり当初の予定に影響が出ないようにしていた。この点は私たちが学ぶべきだと思った。

**大学名：北京外国語大学**

**氏名：周戈**

**テーマ：4.日中間の交流**

充分な相互認識をベースとして両国の人々の誠実な交流を促進することは、日中友好促進を志す次世代の人々にとっての使命の一つであろう。

日本語を学ぶ私としては自然と日本の風土や人情、政治や歴史について一定の理解をしていることから、これまでずっと日本人もまた自然と一衣帯水である中国についてよく理解していると思っていた。しかしながら、実際に日本人と交流をして、彼らには中国を知る上での窓口がないことに気が付いた。このことから中国を知る、また中国と親しむ機会がないことから、たとえ交流ができたとしても互いの情報が対等でないことから共通点を探る機会が失われ、相違点が過度に強調されることになる。

こうした状況においては、テレビや書籍などのメディアを通じ一般人の生活に近い中国の状況を包括的に紹介することが、両国の相互認識を深める上で必要になる。

そしてこうした相互認識をベースに民間の人々が食い違いや敏感な問題を恐れず腹を割って交流することこそが、真に問題解決を後押しする方法であろう。大阪大学での交流の際、私たちはそうした問題について言及することがあったが、それによって悪影響を受けることはなく、双方はそれを機に相互理解を深め、討論を行うことができた。それは正に10月に安倍首相が中国訪問の前にツイッターで述べていた率直に本音で語り合う、というものであった。こうした姿勢こそが双方の理性的な友好交流の展開につながると言える。

**大学名：北京外国語大学**

**氏名：董林**

**テーマ：1.国民性についての理解**

**3.マナーのよさと思いやり**

**4.日中間の交流**

日本のサービス業の発展ぶりは誰の目にも明らかである。その発展の理由の一つは日本民族の内面にある「利他の心理」かもしれない。「利他性」により日本人は何をするにおいても他人の気持ちに配慮している。静かなエレベーターが一日の仕事を終えた人に優れた休息の環境を提供する、会社のプリンターが故障した際に自発的に同僚に対して他のプリンターを使うようメールすることで他人の時間を節約するなどの例はたくさんある。「他人に迷惑をかけない」と

いうことは日本人の人付き合いにおける重要なルールであり、彼らの民族文化においても重要で欠かすことのできないものなのであろう。

またこうした「利他性」の影響の下、私は日本人の思いやりを強く感じることができた。今回のホームステイでは私が出したことをホストファザーやホストマザーがいちいち気にしてくれて、さらにこの二日間では至れり尽くせりのお世話を受けた。こうした利他的な社会はまた利己的な社会でもあり、生活において真に互いのためというものを実践できる日本人は正に私たちが学ぶべき存在である。

この他、利他性の強い日本の人々にこれまで以上に中国人と触れ合う機会が増え、民間の交流が強まれば、友好的で平等な相互認識の高まりにきっと役立つであろう。今回の日本訪問で感じたのは、中国人の日本に対する知識が不足しているのではなく、日本人の中国への認識がはるか昔で止まっているというものであった。今回の活動において私は頻繁に「河南省は田舎なのか都会なのか?」、「中国人は結婚した後に夫の姓を名乗るのか?」といった回答に困る質問を受けた。私は日中の民間交流がこれまで以上に強まることを心より願っている。これこそ「国の交わりは民の親しきにあり」における正しい方法だからである。

**大学名：北京外国語大学**

**氏名：劉娜**

**テーマ：2.集団帰属意識の強さ**

**3.マナーのよさと思いやり**

中国はかねてより「礼儀の国」と呼ばれ、日本は早くから中国の礼節に学びさらにそれを発展させ今日まで受け継いでいる。今回の日本訪問において最も印象的だったのは日本人のマナーの良さと思いやりであった。

ホテルのゲートではスタッフが常に穏やかな笑顔で「いらっしゃいませ」と声をかけ、エレベーターに乗る際自分が乗るのが遅れて他人を待たせたときはすみませんと謝り、たとえ見知らぬ他人同士でも互いに会釈と挨拶をするなど、日本という民族そして国民は心に他者を尊重するという精神を有しており、他者に非常に礼儀正しい。この点は私たちが学ぶべきものだと思う。この他、日本人はまた他者の気持ちをとても気かけ、他者の立場に立って考える。エレベーターや電車では日本人はほとんど静かで、大声で話したり騒いだりすることはない。なぜなら大声で騒ぐことは他者に迷惑をかけると考えているからである。私は自分の実体験を思い起こした。箱根温泉のホテルでの朝食の際、温泉卵が有名だと聞いていたので食べてみようと思い、殻を割ろうとテーブルに軽く打ち付けたがまったく割れなかったので、少し力を入れて打ち付けたところ思いがけず半熟状態の黄身がテーブルと地面にこぼれてしまった。これに恥ずかしく思った私はすぐにテーブルの上の汚れをティッシュで拭き取り、それから地面の汚れを拭き取ろうとしたところスタッフが通りかかったため、私は慌てて謝った。するとそのスタッフは「大丈夫です」と言い、さらに私の服が汚れていないかを確認し、すぐさまハンカチを取り出し地面の汚れを拭き取ってくれた。その時私は、日本人は本当に他人を思いやっているとと思った。もし私たち一人ひとりがこのように他人を思いやり、他人の気持ちを考え、素早く気まずさを解消できれば、この社会はより素晴らしいものになるだろう。

**大学名：北京外国語大学**

**氏名：徐浩天**

**テーマ：3.マナーのよさと思いやり**



私は「マナー」と「思いやり」の二つの面から述べてみたい。まずはマナーについて私が最も印象深かったのは、各所の見学を終えた後に、決まってガイドの中島さんが私たちに「ガラス拭き」、つまり窓越しに手を振り見送りの人々へお別れをさせていたことである。ガラス拭きは元気よくさらに様々な方向に向けて相手の姿が見えなくなるまでやり、車の進行方向が変わった場合はまた方向を変えて続ける必要がある。しかもこうしたマナーは一つの企業だけでなく、すべての企業が行っていた。こうした点は一部の中国人的には面倒もしくは形式主義だと感じるものだが、私は内容が完全には理解されていない段階においては、形式も内容と同様の重要性を担っていると思う。歓送会を終え私たちが空港に向かう時を例にすると、各ホストファミリーが強い日差しの中私たちがバスに乗り込むのを見届け、手を振ってお別れをする、また中には私たちがホテルを離れた後も道路まで走ってきてお別れをする人もいた。その瞬間私の涙はあふれ出そうになった。正に彼らの細やかなマナーから私は彼らの真心を感じたからこそ、私たちは一瞬で心が通じ合い、わずか8日間で築き上げた友情を輝かせているのだと思った。

「思いやり」の面で最も印象深かったのは、至る所で見かけた点字であった。私が思うに、一国の文明の発達度合はその国の少数派や弱者への向き合い方と措置からある程度知ることができる。日本は「身体の不自由な方」へのサポートを極限まで行っていると言える。すべての人々が利便性を感じ楽しく生活でき、いかなる差別も受けない国をいかにして作るのか、これは私たち次世代の人間が考えていかなければならない問題である。

**大学名： 北京外国語大学**

**氏名： 周彩**

**テーマ： 5. アニメなどのソフトパワー**

かねてから我が国ではソフトパワーを向上するという目標を立ち上げているが、ソフトパワーとは何か、今回の日本訪問を通じて私はその答えを見た思いがした。

Panasonic 社への訪問の際、私は同社の伝統文化への重視というものを強く感じた。Panasonic の製品開発では日本の伝統工芸をデザインに組み入れ、その技法によりビジネスを開拓し、伝統工芸により大きな発展の場を提供することで伝統工芸を守ると同時に、人々そして世界により快適な生活をもたらしている。人々に伝統工芸の価値を感じてもらうことで、伝統工芸は現代社会において消滅することなく時代と共に発展していくことができる。

ワコールは主に女性用のインナーウェアを開発する企業だが、近年では新たに民宿事業も行っている。この民宿事業はワコール社が京都の古い建屋をリフォームして行っている。これらの建屋は京都に古くからあるもので、古い建屋は普段の生活には不便になっているが住民の多くはリフォーム資金がなく、たとえリフォームしても京都の古都としての文化的佇まいを損なう可能性がある。そのためワコール社の民宿事業はこうした古い建築物に新たな活力をもたらしている。

中国でも実際のところ多くの伝統的なものが厳しい状況に瀕している。ソフトパワーというのはとても現実味のない幅広い言葉であり、それは実際に文化・精神面に具現化されたものであるべきだと私は思う。日本のものづくり精神はどのように受け継がれているのか、日本はなぜ常に清潔でクリーンな印象を与えるのか、日本の和菓子はなぜ皆が空港の免税店で競って買い求めるのか、これら一つひとつの問題について考える時、私はソフトパワーについてより多くの理解や感想が得られた。

ソフトパワーとは文化や精神そのものだけではなく、経済とも密接に関係し、巨大な経済効果をもたらし、国のイメージさらには人々の精神的拠り所にも関わる、形が感じられるものである。こうした面についていかに隣国から学ぶかは、私たちが今後考えて実行に移すべきものである。

**大学名： 中国農業大学**

氏名：康慧薇

テーマ：1.国民性についての理解

### 6.今後ますます中国でニーズが高まる技術

農業学校の学生である私は、最も基本的なものである食物の面から今回の訪日での体験や収穫について述べてみたい。

日本人は食物を大切にしている。私たちの今回の活動における食事の多くはビュッフェスタイルであったが、多くの日本人は自分が食べられる分だけを取り、食事を終えた際には皿はきれいで、付け合せも残さず食べきっていた。一方中国については、私のホストファミリーから「中国人は食事の際に少し残すのがマナーなのか？」との質問があったが、私はその時何と答えていいか分からなかった。私たちはこれまで以上に食物を大切に、残さず食べることはできないだろうか？

資源の利用という点については食物だけでなく、日本企業の発展戦略などにおいても見て取ることができる。利他の心、集団意識は日本人に深く浸透しており、こうした集団意識は環境保護のみならず伝統文化やヒューマンケアの面にも示されている。今回の見学では伝統文化を融合させ設計を行うパナソニックであれ、女性の美を愛する心を呼び覚ますワコール、また環境や公益を重視する伊藤忠商事、資源の循環利用を実現しているホテルニューオータニ、プラットフォームのサービス料金のみを徴収する非営利の民間組織 JA 全農であれ、いずれも日本人の社会的責任感を示していた。他人に迷惑をかけない、他人の邪魔をしない、他人や社会を思いやる、これらはなぜ日本人の文化がこれほど特別なのかを示している部分かもしれない。またこうした点は中国人として高めることを望んでいる部分でもある。人民に奉仕するというこの言葉はより具体的なものに落とし込むことができると同時に、小さなものでは一つのごみから大きなものでは政治思想といったガイドラインに拡大することもできる。いずれにしても、私はこの言葉がより実際により深く私たちの心に刻まれることを願っている。

大学名：中国農業大学

氏名：李雨濃

テーマ：3.マナーのよさと思いやり

日本は礼儀の国であり、その国民もまた他人を思いやることに長けており、こうした文化は日常の様々な部分に浸透している。公共の場所では大声で話をしない、進んで左側を歩く、思いがけず他人とぶつかってしまった際は進んで謝る等の多くのことを通じて私は他人からの善意と温かさを感じた。

「朱に交われば赤くなり墨に交われば黒くなる」。こうしたマクロ環境において人々は意識的に道徳ルールを守り、無意識に他人を思いやり相手の立場に立って物事を考え「自分がして欲しくないと思うことは、他人にもすべきでない」という考えを持つようになる。これにより人と人との対立が大きく減り、調和のとれた関わり合いが生まれている。人は皆敏感な神経と本質的な善良さを持っており、私たちが微笑みと思いやりで他人と向き合った際、私たちもそれと同様の扱いを受けるのである。

印象的だったのは、企業見学や大学訪問そしてホームステイのいずれにおいても、お別れの際には彼らは私たちの姿が見えなくなるまで手を振ってお別れをしてくれたことであった。私の印象では礼儀は人と人の距離感を遠ざけるもので、一種の疎遠という「遠慮」が存在するが、彼らの礼儀はバランスが良く、人に温もりや感動を与えるもので、この点に私は改めて多くを考えさせられた。

人に距離感を感じさせやすいのは、絶えず礼儀で他人に接し、それを自分の任務もしくは義務とする「建前」である。

日本人の人への接し方は自らの真心をマナーの中に込めており、その満ち溢れたそして真摯な感情は温かなものである。

この土地を訪れて初めて日本の本当の姿を目にすることができた。日本は美しく品がある存在であり、また友好的な姿で私たちの前に現れた。

**大学名： 中国農業大学**

**氏 名： 王新宇**

#### **テーマ： 4.日中間の交流**

日中間の交流についてまず私が考えたのは学生間の交流である。今回の訪日活動では大阪大学と東京大学の学生らと交流した。交流方法は主に一つのテーマについて討論をし、それぞれの意見を述べ合い総括と発表をするというもので、その過程では討論を通じて初めて発見した問題もあった。

大阪大学や東京大学の学生はいずれも英語のレベルが高く、グローバルで多元的な能力を持っていたが、対して私自身の能力不足を認識することができた。だが比較を通じてこそ違いに気づき、努力をしていくことができるのである。

しかしこれは一つの面にすぎない。全体的に日本に留学に訪れる中国人学生はとても多いが、中国に留学に訪れる日本人学生はとても少なく、両者は比較にならない。そのため私たちは日中の学生交流強化の決定を目にし、「3万人規模の日中の大学生交流」の事業について知ることができた。これは両国の努力の結果である。

一方、私たちはまた日中交流は実際のところ学生レベルに限らないことを知っている。企業間の従業員の異動や民間の各種交流もまたそうである。私たちが訪問した企業内の中国人従業員から聞いた話では、こうした交流自体は自分自身と向き合い、比較することができる一種の貴重な経験であるとのことで、私もそのようにすべきだと感じた。交流、認識そして理解を強化することが日中交流における中核である。これらを通じてこそ互いへの認識がより幅広くなり、自分自身の未熟な部分を知った上で調整や改善をすることで絶えず成長することにつながると思う。

**大学名： 中国農業大学**

**氏 名： 王添**

#### **テーマ： 3.マナーのよさと思いやり**

日本は一度来たら離れたくない国であり、私は懐かしさや名残惜しさから涙ながらに東京を離れた。なぜなら日本では心からのおもてなしを受けたからである。日本はどのようにしてこのようなおもてなしを実現しているのか？細やかなながらも煩わしくないマナー、思いやりがありつつも悩ましくない他人への配慮がその要因である。

私は礼儀の国から日本を訪れたが、至る所でより細やかな礼儀を感じた。警備員、運転手またはサービススタッフであれ、利益のために行う形式的なものではなく、いずれも他人に心からの思いやりを感じさせることができることを私は初めて知った。一つの場所を離れる際に私たちに長々とお辞儀をし、姿が見えなくなるまで手を振る、サービススタッフや従業員を見かけた際に会釈と挨拶をする、日本のマナーについては驚かされるばかりであった。だが今では私もそうしたことに慣れ、感謝の気持ちで人々そして世界と向き合っている。

私の浅い知識ではこうした現象が生まれた原因については分からないが、こうした社会は温かく、秩序があることは分かる。一つの個体である私たちは自らを他人の立場に立たせ相手の気持ちを理解してこそ、相手を心地良くさせることができる。私たちは幼い頃からマナーの意識や人との接し方を育成し、それにより周囲の人々を感化させていく必要が

ある。なぜなら人はそうした雰囲気の影響を受けやすいからである。私たちが些細な部分や小さな事から感謝の心で他人に接することができれば、この世界もきっと温かいものとなり、人と人の距離もより近づく。互いに信頼し合っこそ私たちは健全な社会を構築することができるのである。

私たちは日本経済の発展ぶりに驚くかもしれないが、注意すべきは正に彼らのマナーが国の優れた発展を推し進める一助となっているということである。

**大学名： 中国農業大学**

**氏 名： 林百欣**

**テーマ： 3.マナーのよさと思いやり**

#### **4.日中間の交流**

日本人のマナーについては、私たちはおおかた耳にしている。日本人は礼儀正しく、他人に迷惑をかけない。しかし書籍の話だけではぼんやりとした概念でしかなく、実際に体験してこそ彼らのマナーがどれほど感動的で感心させられるものであるかを知ることができる。

まず彼らは、顔を合わせたまたは退社もしくは偶然出くわした際には常に挨拶をする。そして彼らは「こんにちは」、「ありがとう」、「すみません」といった言葉を常日頃から述べる。日本を訪れた当初はこうしたことに慣れていなかったが、慣れるに従い私も一緒に挨拶をするようになった。こうした雰囲気の中では人間の行為や考え方は良い意味で影響を受けやすい。さらに彼らの思いやりについては、ホームステイの折に私たちが外出した際、ある中国人の女の子から道を聞かれた英作さんはどこで下車をするのかを教えたが、しばらくしてその女の子がしっかりと理解したのか気になった英作さんはわざわざ彼女を追いかけ道順を教えたのである。こうした細やかな部分に私はとても感銘を受けた。道を教えるといった些細な事でも最善を尽くす、これこそ日本人のひととの接し方である。それから今回訪問した先々では見学を終えその場を離れる際は、従業員の皆さんが私たちを見送り、手を振りお別れをしてくれた。時にそれは数分間にわたり、雨の日でもそれは変わらなかった。初め私は少し大袈裟だと思ったが、8日間が過ぎ、最後にホストファミリーや横山さんそして中島さんとお別れの際には、私たちは涙しながら手を振りお別れをした。彼らの真心は私たちの心を打つもので、こうした点も日本人特有の温かさと優しさである。

それから日中間の交流について述べる。両国の付き合いは密接であり、貿易、企業、科学教育、民衆の間を問わず互いに依存している。私のホストファミリー曰く、私は彼らが招く7人目の中国人学生とのことで、この点からも日本の人々の中国への友好感情が見て取れる。私たちは今回の訪問を通じて学び、見てそして感じた事を中国の友人や家族にも伝えていきたいと思う。

**大学名： 北京科技大学**

**氏 名： 趙紓羽**

**テーマ： 1.国民性についての理解**

#### **3.マナーのよさと思いやり**

かつて私は日本の多くの習慣やマナーについて不必要または度が過ぎると思っていたが、今日ではそうしたものについて私はその必要性を十分に理解することができる。

サービススタッフへの感謝、他人へのマナー、会社内でのルール、こうしたとても行き届いたまた「面倒」なマナーは

私が思うに他人の労働への尊重だけでなく、自身を心地良くし、幸福感を高めるものであり、長い期間これらが続けてきた社会は当然のように文明的で調和がとれている。

他人に迷惑をかけないことは日本人の心に根付いた信条である。例えば使用後の箸を箸袋にしまうという行為は、面倒に聞こえるし、また他人の手を煩わせるものであるが、ある日私がサービススタッフに皿を渡す際に箸がスタッフの手に触れたことがあり、その時になって私は初めて箸を箸袋にしまうことの意味を理解することができた。

物事の表面だけを見ているはその由来を発見したり理解したりすることはできない。私は自分の安易に結論を下す習慣を見直すべきかもしれない。真にこの社会を分析するには、その中に入り込むことが最良の方法である。

**大学名：北京科技大学**

**氏名：李逸軒**

**テーマ：3.マナーのよさと思いやり**

私たち漢民族にはかねてより「礼儀の国」との呼び名があるが、今回の日本訪問において私は礼儀を極限まで高めた大和民族の姿を目にした。

日本訪問以前、私はアニメや映画そしてメディアなどを通じて日本の驚くべきマナーの周到さについてある程度の理解をしていた。だが日本を訪れ、現実の日本のマナーはかつて耳にしていたよりもさらに優れていたことに気が付いた。日本での一週間余りの期間において私が最も多く耳にしたのは「ありがとう」という言葉で、他者にどのようなサポートをしようとも、日本では多くの人々が小さな恩を大きな恩として報いる。また、他人同士の挨拶や譲り合いなどについても、私はとても心地良く友好的なものを感じた。

この他、日本では路上でクラクションの音を聴くことはほとんどない。皆は交通ルールを順守しており、都市の交通体系も整然と運営されている。地下鉄車内では話をする人も少なく、各自が自分のすべきことをしている。日本人がとある待合室に何百人といっても目を閉じると誰もいないように感じるとの話を私は耳にしたことがある。このことから、日本人のマナーや思いやりの行為は各自が守るべきルールであることが分かる。

最後に、日本人の見送りには心が温かくなった。お辞儀をした後必ず視界から消えるまで手を振ってお別れをする。日本人のマナーには私たちが学ぶべき点がまだまだたくさんあり、私たち大学生はこうした風習を持ち帰り自ら行うことで周りに広めるべきである。

**大学名：北京科技大学**

**氏名：劉伊迪**

**テーマ：1.国民性についての理解**

**3.マナーのよさと思いやり**

日本国民のマナーの良さについては世界中の人が多少なりとも知っていると思う。しかし百聞は一見に如かず、私はこの土地を訪れ日本人の人々と交流をして初めてより確かな実感が得られた。まず初めに日本人は他人との交流において「相手の立場に立って考慮する」ことを優先していると感じた。例えば、三菱UFJ銀行の見学における、「プリンターが故障した」後の日本人従業員の処理方法を通じて、私たちは日本人が他人への思いやりを優先していることを知ることができる。また日本では、何かと頻繁に「ありがとう」、「すみません」等の言葉を耳にする。さらに日本人はとてもマナーに気を配っており、エレベーターではたとえ見知らぬ人であっても笑顔で会釈をする。

日本の国民性についての理解に関して、私はいくつかの点を知ることができた。第一に、日本人はあらゆる事物に畏敬の念を持っている。彼らは万物には魂が存在していると信じているため、尊敬の心を持ち、自然を守り、生態環境の保護に気を配っている。第二に、日本人の生活は洗練されており、ディテールに気を配る儀式のような感覚が存在する。ホームステイ時の食事の際、並べられた食器などはとても美しく、箸置きまでもあった。そして彼らの勤務時の制服もとてもきちんとしていて、活力が感じられた。

以上が私のささやかな見解である。将来的に日本という国について改めて理解を深める機会があることを願っている。

大学名： 北京科技大学

氏名： 劉哲

テーマ： 2. 集団帰属意識の強さ

3. マナーのよさと思いやり

6. 今後ますます中国でニーズが高まる技術

1. 企業は国の経済における命綱であり、日本企業が示す強大な企業理念や従業員間の団結力には感心させられた。日本企業は企業理念をとっても強調しており、パナソニックの「A Better Life, A Better World」や伊藤忠商事の「ひとりの商人、無数の使命」からは従業員の他人を利する心、国を利する心とは何かを知ることができた。そして企業が信頼や理解を強調することから、私は日本企業の従業員の団結力の源を見た思いがした。
2. 日本の人々に対する第一印象は、とても礼儀正しく友好的というものであった。JAL 日本航空から始まったすべての日程において、サービススタッフは皆親切で行き届いたサービスを提供していた。また日本の人々はエレベーター内で会ったり、朝に会ったりすると互いに挨拶もしくは会釈をする。こうしたマナーや調和もまた日本を国民の摩擦度合（矛盾や衝突の発生度合）の最も小さい国としている。
3. ホテルニューオータニのエコ施設の見学では、同ホテルのごみ処理技術に感心させられた。ホテル内部においてごみは81%のリサイクル率に達しており、同ホテルのごみの分類回収処理技術は私たちが学ぶべきものである。また日本にこうした環境保全分野の先進的技術を学ぶことでしか、中国のスモッグ対策や青空防衛計画はやり遂げることができないと思う。

大学名： 北京科技大学

氏名： 張凱集

テーマ： 3. マナーのよさと思いやり

4. 日中間の交流

6. 今後ますます中国でニーズが高まる技術

ホームステイの2日間、ホストファミリーは私を色々な所に連れて行ってくれた。その中で最も印象的だったのは、スカイツリーで写真撮影を手伝ってくれたお姉さんであった。と言うのも、その写真は撮影の後に気に入れば買い取ることができ、さらに無料で自身のスマホで写真を1枚撮ることができる。撮影担当のお姉さんは無料の撮影でもとても親切で、うまく撮れなかった際は自発的に「one more」と言って撮り直した。また現像担当のお姉さんもとても優しく、有料の写真が要らない場合でも丁寧に写真を片付けて感謝の言葉を述べた。こういった場合、中国においてもサービス態度の良いスタッフはもちろんいるが、冷たい態度をとる人の方が多いと感じる。だが日本に来てから出会ったすべてのサービス

スタッフはとても親切で礼儀正しく、意思疎通が不便な場合でも英語で丁寧にわかるまで繰り返し説明してくれた。

ホストファザーやホストマザー、懇親会での同年代の若者や伊藤忠商事の従業員との交流では、日中における多くの共通点と相違点を発見した。東京の若者も私たち北京や上海の若者と同様に高い家賃や生活のプレッシャーを抱えており、仕事を頑張らなければ良い暮らしをすることができない。また日本の大学生は、実家が学校から近くても学校近くに部屋を借り、親と同居することはない。一方中国では卒業した多くの学生は両親と同居している。中国のスモッグに関しては、日本にも以前は存在していたが、森林カバ率の向上や環境保護意識の強化により、現在では日本は空気がさわやかで、また清潔な社会を構築している。この点については中国が学ぶべき素晴らしい模範である。

大学名：北京林業大学

氏名：楊騰紫

テーマ：1.国民性についての理解

3.マナーのよさと思いやり

我が国はかねてより「礼儀の国」を自称しており、礼儀を重んじる、礼節にこだわる、自分の考えで人のことを推し量る、相手の立場で考える、これらは我が国が古くから重視してきたことである。日本は古代に中国から学ぶ過程においても「いいとこ取り主義」の原則を守り、多くの中国の礼儀を学びそれを改良した。これには「礼儀の国」の「無冠の帝王」の誉れが非常に感じられる。私は日本についてとても「静か」な印象を受けた。路上では車が通りすぎる音だけでクラクションの音は聴こえない。たとえ夕方のピーク時で道路が渋滞していても、クラクションの「苛立ち」の音は聴こえない。日本人のマナーは、顔を合わせた際の挨拶から失礼があった際の謝罪、「静か」な道路から丁寧なサービス、食前の「いただきます」から食後の「ごちそうさまでした」など日本社会の様々な部分に浸透している。日本語には「おもてなし」という言葉があるが、これは他人を思いやり、相手の立場で考えるという概念からきている。日本人は幼い頃から「他人に迷惑をかけない」よう教育されている。日本語の敬語には独特な文法があり、すべての人が最も頻繁に使う言葉には「ありがとう」、「すみません」といったものがある。日本人に比べ中国人は無頓着であり、話し声は大きく、大雑把である。中国人から見た日本人は事務的でユーモアがなく、しきたりに束縛された人々である。しかし日本人は非常に自律的で、煩雑なマナーを守る一方熱い心も持っている。しかもそうした日本人だが、とある場所では中国人に負けないほどうるさくなる。昼間はスーツに身を包み上品で礼儀正しい彼らが、居酒屋では大声で笑いお酒を飲むなど、気兼ねする様子が全くなくなる。日本人はこのように「落ち着く」こともできれば「情熱を持つ」こともできる民族であり、とてもユニークだと感じた。「礼儀の国」の中国の若者である私たちは日本人ほど自分を厳しく抑制することはないが、基本的なマナーについては身に付けるべきだと思う。

大学名：北京林業大学

氏名：劉禹辰

テーマ：1.国民性についての理解

3.マナーのよさと思いやり

4.日中間の交流

今回の訪日では多くを考えさせられたが、中でもいくつかの些細な点が私にとって印象的であった。企業見学の際にはテーブルに飲み水やプレゼントがきれいに並べてあった。初めはそれらのペンや文房具などは私たちに貸してい

るもので、持ち出してはならないと思っていた。しかし中島さんからそれらをもらわないのは失礼になるとの話があった。これは私の当初の理解とまったく異なっていた。

しかしそれはなぜであろうか？相手の立場に立った思いやりなのだろうか？恐らくそうだと思う。もし相手がわざわざ準備したプレゼントを私がテーブルに置いたままだとすれば、それはプレゼントを気に入らなかったことを意味する。それはとても失礼になる。

また私は「お返しの礼をする」、「皆を客人とする」との心理が関係していると思う。ホストである企業がささやかな気持を示したからには、私たちはそれを喜んで受け取り感謝の意を示すべきである。

この他、私たち訪日団を迎え入れてくれた各企業はとても細やかなスケジュールを作り、また資料やプレゼントなどを準備してくれた。今回お世話になったすべての企業から真摯な姿勢を感じることができた。彼らにとっても感謝している。日本企業がこうした姿勢を継続し、改めて日本の製造業が黄金時代を迎えることを願っている。

**大学名：北京林業大学**

**氏名：冷和華**

**テーマ：3.マナーのよさと思いやり**

この数日間見学をした企業では、すべての持ち場で働くスタッフが仕事に対してひたむきで積極性があり、たとえ方向を指し示すような仕事であれ情熱をもって行っていた。またいずれの会社の受付担当者も笑顔で出迎えや見送りの挨拶をしていた。これは一種の業務態度であるだけでなく、他人への尊重の表れである。こうした人と人が互いに尊重するという基礎の上に作られた国というものは必ず調和がとれ安定している。

日本人の他人への接し方は職場以外に日常生活においても表れている。今回日本で私は何度か道を尋ねたが、皆さんとても親切で私が理解しやすいよう身振り手振りを交えて教えてくれて、嫌な顔をする人は誰一人いなかった。中には自転車に乗ったおじいさんやイヤリングをたくさんつけた若者などが自発的に「大丈夫ですか？」、「何かお探ですか？」と尋ねてくるなど、皆優しく礼儀正しかった。これには日本の社会全体に浸透しているヒューマンケアの精神に感心せざるを得なかった。マナーがあり互いに尊重しあい、相手を思いやる、日本の精神文明構築は本当に成功している。良い文明の構築は人々の幸福な生活や社会の安定を保証するものである。

**大学名：北京林業大学**

**氏名：斬松**

**テーマ：3.マナーのよさと思いやり**

私は日本語を専攻していることから、日本人が「礼儀正しい」ことについてはかねてより多少知っていた。しかし日本に来てからどれほど「礼儀正しい」のか、「思いやり」とは何か、「お持て成し」とは何かを知ることができた。①日本の点字や視覚障害者誘導用道路の普及度合は中国よりはるかに高く、至る所で点字が使われ、視覚障害者誘導用道路もしっかりとした整備また利用がされていた。②他人（特にサービス業）が商品を渡す際には常に正面の部分私に向けて渡してくれた。ホテルのフロント、原宿のお店のレジ、池袋のお店のレジなどすべてがそうであった。彼らは自分の都合を考えるのではなく、自分がどのようにしたら相手にとって便利なのかを考えている。③トイレではその大きさを問わずいずれも車いす利用者用のトイレが設置されていた。この他、赤ちゃん用のスペースも見かけた。④他人とお別れをする際には相手を見送り、姿が見えなくなるまで手を振る。訪日6日目に私は東京大学の辻さんと会った。そしてお別



れの際に私は階段を下りて行ったが、振り返ると辻さんはその場を離れることなく私を見送ってくれていた。その瞬間私はとても感動した。⑤他人のプライバシーを尊重する、他人への配慮が程良い。ある問題について答えたくなければ相手も聞いてこない。⑥日本の空港には「Welcome to Japan、お帰りなさい」との表示があり、英語は外国人に向けたもので、日本語は日本人に向けたものである。こうしたものには誰であれ心が温かくなるであろう。

生活のあらゆる面で日本人は究極を求めている。そのため、マナーや思いやりにおいても日本人は素晴らしく、常に相手の立場で物事を考え、己のみならず相手の利便性を重視している。これは正に私たちが学ぶべきものである。

大学名： 北京林業大学

氏 名： 王韻玉

テーマ：1.国民性についての理解

### 3.マナーのよさと思いやり

日本はその礼儀の国の名称とサービス業のレベルの高さで世界に名を馳せていることは周知のとおりである。今回日本を訪れ、私は日本人のマナーや思いやりの面での一連の取り組みを実際に目にすることができた。

まず初めに点字や視覚障害者誘導用道路が至る所にあり、飛行機を降りた直後のトイレからバスを待つ狭い通路、ひいては青信号の際に音が鳴る信号灯まで、特殊な人々の外出における不便を減らすための様々な工夫を目にすることができた。日本の視覚障害者誘導用道路のカバー率の高さに私は非常に驚かされ、「身体の不自由な人でも手助けを必要とせず自由そして安全に健常者のように外出できる」環境を構築しているという印象を受けた。

次にレストラン内でずらして並べられた座席、会社内の個人用事務スペースなどは、一人でいることを好み、邪魔されることを好まない人への利便性を大きく高めている。これは細やかな配慮というだけでなく、多様性に対するまたマイナー向けの一つの理解であると思う。

周到な礼儀については、企業見学の際の接待担当の従業員抜きには語れない。彼らは常に快適さを感じる距離感で見学ルート上に現れ、道案内をしたり皆からの質問に答えたりしていた。こうした周到さは他人を充分思いやった成果である。

もちろん日本が自身の礼儀をこれほどまでに高められた理由は、彼らの持つ「恥の文化」を代表とする国民性とは切り離すことができない。そのため私たちが日本にこうした点を学ぶ際は、そのまま真似てはだめで、私たち自身の特性や問題点を模索し、方向性を持って学ぶ必要がある。